

運転現場の視点2

消雪パイプと 関わる人達の活躍(4)

● 樋口 良之 福島大学理工学群 共生システム理工学類 准教授



ひぐち よしゆき

東京生まれ
博士(工学)長岡技術科学大学

平成5年 ㈱重松製作所 研究員

平成6年 山形県庁 上級職員 技術
吏員

平成12年 長岡技術科学大学 講師

平成16年 長岡技術科学大学 助教授

平成19年 福島大学 准教授

・研究分野は「生産および物流シ
ステムのモデリングに関する研
究」ほか

只見町では、町役場から委託された方が地区の消雪パイプの運転スイッチを操作しています。今回も、先月号に引き続き、この消雪パイプの運転に尽力されている方々についてお話しします。

昨年の冬に、只見町で運転操作を担当されている方のうち、8名の方をご自宅に訪問させていただきました。お話しをうかがうことができました。消雪パイプの運転操作を担当している方には、様々な努力と工夫が見られます。只見町では会津地域の天気予報より、新潟の方の予報を参考にしているのが現実的かどうかがい



福井にある消雪パイプの操作盤

ました。今では、局所的に細かな時刻区分で只見町の天気予報を放送やインターネットから入手している方もいらっしゃいます。そのため、細かく天候に対応することができると、電力消費を抑えるなど様々な環境問題に配慮し、こまめに、あるいは、深夜に、消雪パイプの操作へ出ることも多いそうです。また、天気予報や天候、路上の残

雪水を見ながら、学校へ通う生徒たちへ散水や融雪水水がはじかれにくいように、こまめに消雪パイプの作動と停止を行っている方もいらっしゃいます。勤めをしながら、家族の世話をしながら、良好な消雪道路を維持することは簡単ではありません。

運転操作を担当されている方の努力の限界を超えた問題として、消雪パイプの老朽化があります。もともと、只見町ほどの寒冷地では消雪パイプの使用には注意が必要と設計指針には示されています。設計通りの性能が発揮されてこそ、消雪パイプは有効に機能するわけです。もし、井水の温度や取水量が低くなれば、24時間散水しても道路の消雪は難しくなります。また、昭和40年代に設置された消雪パイプは老朽し、性能の維持が難しくなっています。特に、運転操作を担当されている方は、井水の水位低下、散水ポンプの老

朽化、散水ノズルの損傷などによる散水量の低下に悩まされています。時には、地区の方から、操作のタイミングについて注文があったり、理解できないような運転を指摘されたりすることもあります。

運転操作を担当されている方が確認すると、突発的な機器の故障、慢性化した機器の不具合によって、思うような操作ができなかったり、誤動作であったりすることもあります。このような状況が続く、運転操作を担当されている方とご家族に、かなりの心労が重なることもあります。

このように、消雪パイプの運転操作を担当されている方は、自分自身では解決困難な課題と向き合いながら、努力と工夫を重ねています。消雪パイプ設置地区のみならずのご理解と、時には暖かい励ましがあればと思います。